ろらんずめいつ、わるきゅぅれっ！

　風呂場から出た俺達は、素早く部屋着に着替える。俺は上が無地の白いシャツで、下は黒いズボンと地味な物。詠はベージュのブラウスに、白いハーフパンツだ。下着は流石に男物だが、この服ももしかして、レイや樹葉の意見なのだろうか？

　そんなことを考えながら脱衣所を出ると、既にレイと樹葉は食卓についていた。テーブルの上には、トーストやマッシュポテト、スクランブルエッグ等が並んでいる。俺とレイが朝は結構食べる方なので、量は多めだ。不意に、俺の腹が健康的な音を立てる。

「ほら、ロランと詠ちん、さっさと食べよー！」

　レイが元気な声を出し、俺も詠も「はいはい」と返して椅子に座る。

　入口に近い席から時計回りの順で、詠、樹葉、レイ、そして俺。

　これがこの部屋に住んでいるメンバー全員だ。部屋に住める人数の上限には一人足りないが、ただ単にメンバーがいないだけで、特に深い意味はない。それ故空いている部屋がひと部屋あるが、そこは物置と化している。誰か入ってきた時に大いに困ることは想像に難くないが、その時はその時に考える、というのがこの部屋の室長、及び俺達のリーダーのレイが言っていた。

　ちなみに『ワルキューレ』というのは戦乙女のことであり、当然メンバーの七割は女性である。この部屋は女二人と男二人――いや、女三人と男一人に近いが――で、実は一つの部屋に男が二人以上住んでいるのはこの部屋だけである。大抵は全員女か、いても男は一人だけだ。その男の苦労は想像に難くなく、この部屋は肩身が狭くなくて良かったと、心の底から思う。

　合唱が終わるや否や、そのレイはスクランブルエッグを自分の皿山盛りにすくう。樹葉が「そんな急がなくても」と呆れたような顔をしており、それについては俺も同感だ。いや、まあ、俺も既にマッシュポテトが自分の皿に山盛りになっているので、人のことは言えないが。

「ロラン、トーストに何塗る？」

「マーマレード」

　テーブルの真ん中付近にある小さなビンを指差し、詠にそれを取ってもらう。ビンを受け取って、中のオレンジ色のジェル状の物体をすくい上げ、トーストに乗せて薄くのばした。

「ロラン、ちょっとがっつきすぎだよ？　急がなくても、おかわりも時間の余裕もまだあるし」

　トーストを勢いよく齧り、あっという間に一枚平らげた俺を見て、樹葉がクスクスと笑いながら言う。だがそのセリフは、俺の隣で早くも二皿目の山盛りのスクランブルエッグを平らげたレイにも言ってやって欲しい。

「知ってるよ……わるい、牛乳ついで」

「あ、私も」

　俺とレイがコップを樹葉につき出す。樹葉はちょっとの間、俺のコップとレイのコップを見比べたあと、やれやれと言ったように息をついて、俺とレイのコップに牛乳を注ぐ。

「サンキュ」

「どーもでーす」

　軽く礼を言ってから、俺とレイは、注がれた白い液体を一気に飲み干す。するとなぜか、詠がプッと吹き出した。

「まるで双子みたいですね。いや、姉弟ですかね？　飲み方がすごく似てました」

　なんだそりゃ、と思って右隣を見ると、レイはなぜかニヤニヤした顔で俺を見ていた。

「……なんだ？」

「いや、ロランと双子ってのも、悪くないなーって。どう？　いっそ、共通の苗字でも考える？」

「意味分からん」

　レイから目をそらすと、樹葉も笑いを堪えているような顔をしている。そんなにウケるようなことだったか。

　俺は二枚目のトーストを取って、今度はマーガリンを薄く広げるように塗った。

「あ、そうだ。皆聞いて」

　朝食を食べ終わり、後片付けに入ろうとしたところで、思い出したようにレイが言った。

「今日って三人とも入学式で、その後暇でしょ？　終わったら、商店街の倉庫の整理を頼まれてるんだ。スケジュール確認したら、三人とも三時頃終わるみたいだから、式が終わったら部屋で着替えてから、すぐに向かってくれない？　場所は『呉服屋中村』ね。私は入学式の後片付けがあるから、ちょっと遅れるけど、その間三人でよろしく！」

「……悪いが、俺もちょっと遅れる。荷物の搬送作業を頼まれているんだ」

　実は俺も、入学式の後に、商店街の人に頼み事をされていた。そういえば、まだレイには言っていなかった。

　だがそれを聞いたレイは、ちょっと困ったような顔をする。

「えー……重いものとかあるだろうし、女の子二人じゃ、ちょっと心もとないなぁ」

「僕は男です！　重いものだって、ちゃんと運べます！」

　即座に反論する詠だが、レイは唸るような顔で首を横に振る。

「詠ちんのその細い腕じゃ、ちょっと説得力に欠けるかな？」

「いや、大丈夫だ」

　俺がそう言うと、詠は目をキラキラさせる。残念ながら、そっちについては俺もレイと同感だが、敢えて口には出さない。

「搬送作業つっても、大した量じゃないみたいだ。多分、十分もあれば終わると思う。『呉服屋中村』なら俺のところと目と鼻の先だから、ちょっとの間二人に頑張ってもらわないとだけど、すぐ行けるよ。重いものがあれば、後回しにしてくれれば問題ない」

　困った顔はそのままだが、それを聞いてレイは頷く。詠の目のキラキラが、気が付くと別のものに変わっていたように見えたのは、多分俺の気のせいだろう。

「じゃあ、そっちはいいとしよっか。じゃあ、片付け開始っ！」

　手を鳴らすと同時に、レイがそう言った。

「あー、違うって、ロラン」

「えっ……と、こうか？」

　後片付けが終わり、俺は自分の部屋でネクタイを締めるのに四苦八苦していた。予想していたことだが、これが中々難しい。やむを得ず樹葉に手伝って貰っていたが、現在八時十五分。新入生は八時半までに学校に行かなければならず、学校まではここから歩いて十分くらいなので、そろそろ家を出ないとまずい。詠とレイは、既に家を出ている。

　だが、樹葉が首を傾け、難しい顔で唸る。

「うーん……違うかな？　ちょっと顔上げて」

　そう言って、俺の首のあたりをまさぐる。樹葉の顔が近い。さっき詠に髪を洗ってもらった時もちょっと恥ずかしかったが、これはその比ではなかった。整った顔の異性にこうも近づかれると、こんなにも恥ずかしいのかと、俺は自分の顔が赤くなっているのを自覚しながら思う。ネクタイに集中しているせいか、それとも顔を上げているせいか、樹葉にこのことを気づかれていないのが幸いだ。

「……ん、これでいいかな？」

　どうやら上手く結べたようで、樹葉が俺から離れていく。心の中でホッと息をついて、俺はブレザーを羽織った。俺は制服にはあまり詳しくないが、ダークレッドという、血を思わせる色のブレザーは、中々異質だと思う。ズボンとネクタイは黒いのに。

まぁ、この色が異質に思えるのは、俺の私情が絡んでいるのかもしれないが。

「……」

「……どうしたの？　ちょっと顔色悪いよ？」

　物思いにふけっていた俺をどう思ったのか、心配するような表情で樹葉が顔を覗き込む。どうやら、血の色を連想したせいで、余計な心配をさせてしまったようだ。心なしか、気分も悪くなってきた。俺は慌てて、首を振る。

「大丈夫だ。何でもない」

「でも……」

「いいからいいから。鏡で全身見たいから、ちょっとそこどいて」

　納得していない顔の樹葉にそう言うと、樹葉は腕時計をちらりと見て――多分、時間的にまだ余裕があれば、問い詰めようとしたのだろう――渋々といった様子で頷く。学校行っている間に忘れてくれると俺としてはありがたいが、一応、言い訳を考えておいた方がよさそうだ。

　鏡で全身を眺めてみると、我ながら線の細い人間だと思う。ちょっと大きめのブレザーを羽織ってみると、それも相まって実に弱そうだ。目のあたりまで伸びた黒い前髪と、男にしては大きめの目。後ろ髪も伸びてきて、もうちょっとでセミロングになりそうだ。詠には敵わないが、ちょっと努力すれば女装してもバレないかもしれない。そんな自分に嫌気が差し、思わず溜息をついた。

「似合ってるよ？」

　それをどう思ったのか、樹葉は首を傾けながらそう言った。樹葉も俺と同じ色のブレザーを羽織っているが、少なくとも俺よりはマシに見える。赤と黒のチェックのスカートがいい感じを醸し出しているからだろうか。だが、そんな樹葉の制服姿も様になっているかと言われると微妙だ。

とは言え、そんなことを本人に言えるわけもないので、俺は俺自身の姿に対して思ったことだけ素直に口にする。

「……なんか貧弱で、格好悪い」

「え、そう？　いつもより格好いいって私は思ったけど？」

「あれ、俺っていつもこれ以下？」

　がっくり膝を付きそうになるのをどうにか堪えたが、声が震えるのは隠せない。自分が格好いいと思っているわけではないし、確かに日々闘っている割にはちょっとばかりなよなよしている体つきだが、これは中々にショックだ。せめて体つきだけでも何とかすべく、練習量はもうちょっと増やすべきか。

「これ以下ってわけじゃないけど」

　そんな俺を憐れに思ったのか、労わるような顔と声で樹葉は言う。

「まぁ、確かにいつもは格好良くはない……かな？」

「ま……マジですか」

　俺の顔は、さぞ情けないものになっていただろう。止めを刺された俺は、そう呟くしかない。

「あ……別に格好悪いわけじゃなくって、格好いいとはちょっと違うってだけで……」

「あれ、まだ言いますか？　俺のＨＰはもう無いんだが……」

「え……えっと、あっ、もうこんな時間！　急がないと、遅れちゃう！」

　慌てたように樹葉は話を現実的な事に変える。確かに時計を見れば、もう出ないと間に合いそうもない。

　俺と樹葉はバッグを持って、玄関へと向かった。